

一般演題（ポスター）

1日目 10月16日（木）

PA-001

看護師のワーク・ライフ・バランスに関する調査 ～残業時間と余暇時間の関係～

日本赤十字社長崎原爆病院 看護部

○宮原 梓、橋本 忠明、野中 広世

1. 目的：残業時間数が多いことで仕事と生活における個人の理想を実現できていない現状があるのではないのかと疑問に思いB病棟看護師におけるWLB（残業時間と余暇時間の過ごし方の関係性・満足度）の実態調査を行った。
2. 方法対象：A病院B病棟で勤務している正規採用看護師23人
期間：2013年6月1日から同年6月30日
場所：A病院B病棟
方法：質問紙調査
3. 結果・考察有効回答人数は19人であった。2013年6月B病棟平均残業時間は10.8時間であった。仕事と生活の理想の割合では仕事よりも生活に多く時間をおきたいと考えている人は78.9%であった。仕事と生活の実際の割合では、生活よりも仕事に多く時間を費やしていたと感じた人は100%であった。残業時間の量が多いと答えた人は36.8%、どちらでもないは52.6%、少ないは5.2%であった。残業時間量が多いと答えた人よりどちらでもないと答えた人が多く残業時間量と個人が感じる理想と現実の差は直接的な関連性は低いのではないのかと考えられる。仕事と生活のバランスの満足度を10点満点で答えてもらった結果、【1年目から3年目の看護師】では平均5.5点、【4年目から10年目の看護師】では平均5.8点、【11年目以上】では平均5.6点と平均5点以上となり、理想と現実には差が生じていても満足度とは関係していないと考えられる。また年齢や看護師経験年数での差は小さく、個々のライフスタイルや価値観が反映されていると考えられる。
4. 結論：「残業時間量」と「仕事と生活のバランスの満足度」の間に関係性は認められなかった。「仕事と生活のバランス」の理想と現実には差はあるが、満足度との関係性は認められなかった。

PA-003

13時間夜勤導入の効果 ～疲労と睡眠への影響・16時間夜勤と比較して～

小川赤十字病院 看護部

○水野 恵、山崎 みつ江

- 【目的】疲労感や勤務中の睡眠、勤務体制に対する満足度について、13時間夜勤と16時間夜勤の病棟看護師と比較し、看護師の身体的変化の影響について実態調査で明らかにする。
- 【方法】対象：13時間夜勤導入病棟（以下：13時間）の看護師18名と、16時間夜勤病棟（以下：16時間）看護師24名。
調査期間：2013年10月20日から11月20日。
調査・分析方法：自記式質問紙による意識調査。調査内容は、1ねむけや不安定感等の自覚症状、2眠気、3勤務体制の満足度等について行った。1に関しては夜勤開始前・後に調査した。
- 【倫理的配慮】質問紙は無記名とし、調査への参加は自由意思であること、個人が特定されない事を約束し配慮した。
- 【結果及び考察】アンケート回収率は、13時間：18名/26名（回収率69%）。16時間：24名/33名（回収率72%）。自覚症状では、ねむけ感、不安定感、不快感、だるさ感、ほやけ感について調査した。夜勤前後の差は16時間の方が13時間と比べ不安定感以外の全ての項目で高く、特に「ねむけ感」が高かった。眠気では、16時間で13%の覚醒良好を示したが、大半は睡眠不足を示した。勤務体制の満足度では、16時間で「大変満足」「満足」「やや満足」が81%。13時間では「大変満足」「満足」「やや満足」が32%であった。今回の調査結果、16時間は13時間に比べて自覚症状のねむけ感、不快感、だるさ感、ほやけ感の前後の差が高く、これは夜勤終了後の疲労感が16時間の方が強い事を示している。しかし、13時間の勤務体制に対する満足度は低かった。これは新たに導入したロング日勤への不満感が牽引し、13時間夜勤の満足度の低下に繋がったと考えられる。13時間夜勤定着の為には、更なる検討が必要である。

PA-002

変則2交代制勤務（12時間夜勤）導入に向けての取り組み

高松赤十字病院 看護部

○高橋 人己、大須賀 宏美、伊青 みどり

- 【はじめに】当病棟は、脳外科・眼科・耳鼻科・皮膚科・歯科の外科系混合病棟であり、平成25年度病床利用率97.3%、平均在院日数11.1日、看護必要度22.3%と業務が多忙な病棟である。日本看護協会が公表した「看護職の夜勤・交代制勤務に関するガイドライン」に沿って勤務体制を検討するにあたり、スタッフにアンケート調査を実施した結果、2交代制勤務希望者が多かった。そこで業務を見直し、体制を整えた上で平成26年1月より試行した。
- 【取り組み・経過】看護師一人一人のワークライフバランスを考慮した勤務時間の設定や、それに合わせた看護方式の検討をした。固定チームナーシングに機能別を取り入れた看護方式に変更し、体制を整えた上で平成26年1月より変則2交代制勤務の試行を開始した。試行後3ヶ月のアンケート調査では、メリット：1. 日勤-深夜がなくなり心身の負担がなくなった。2. 準夜明けの休みがなくなり、休日が有効活用できる。デメリット：1. 勤務の拘束時間が長い。2. 看護必要度の高い患者や認知症患者が増えると遅日勤務が体力的に負担である。3. 遅日勤の夕食時間が遅い等の意見があった。懸念した夜勤の仮眠時間は平均93.8分確保できていた。スタッフに2交代制勤務試行を継続するか確認した結果、全員が継続を希望した。
- 【今後の課題】疲労度テストや時間外労働時間の比較、スタッフへのアンケート調査より業務内容や勤務時間を検討し、問題点の改善に取り組んでいく。

PA-004

労務環境の改善の取り組み ～13時間夜勤導入の満足度調査結果報告～

小川赤十字病院 看護部

○田中 勝枝、高山 弘子

- 【はじめに】H25年日本看護協会は、看護職の夜勤・交代制勤務に関するガイドラインを出した。当院では、長く働ける環境を作るため13時間夜勤を導入し、2度の満足度調査を実施したのでその結果を報告する。
- 【取り組み】H25年4月看護部でモデル病棟を内科と外科病棟と決め、5月には病棟会で13時間夜勤導入についてスタッフに説明した。6月には13時間夜勤導入に関する調査を実施した。その後、個人面接でも13時間夜勤についてスタッフから意見を聞いた。スタッフを巻き込んだワーキング・グループを中心に業務改善に取り組んだ。7月には12時間夜勤を導入している他病院を見学した。（師長2名）8月に内科病棟で13時間夜勤を導入しその後も13時間夜勤を進めながら業務改善に取り組んだ。10月には外科病棟も13時間夜勤を導入した。11月にこの2病棟で満足度調査を実施し、12月には調査結果から更に業務改善を行った。H26年4月に2回目の満足度調査を実施した。
- 【調査実施時の倫理的配慮】調査用紙は無記名。参加しなくても不利益を被らない事とした。
- 【回収率】H25年11月対象看護師：53名 回収率86.5%。
H26年4月対象看護師：57名 回収率96.5%
- 【結果及び考察】11月の13時間夜勤に対する満足度調査で「満足」「やや満足」「どちらでもない」を含めると75.5%だった。H26年4月の満足度調査では86%に上がった。その理由として業務改善を重ねた事、13時間夜勤の体制に、身体が慣れて楽になったと実感できた事が考えられる。しかし13時間夜勤を導入することで、同時にロング日勤（12時間）も導入されたが、ロング日勤に対する不満が多く、今後の課題として更に業務整理・改善をして看護師の労務環境の改善に取り組む必要がある。